

魔法を使う宣教師 西坂の殉教者・トマス金鍔次兵衛

取材協力
片岡 千鶴子修道女
(長崎純心聖母会)



神出鬼没。人々の意表をつく行動に、「魔法を使う宣教師」とトマス金鍔次兵衛は長崎旧記類に記されています。

次兵衛は1600年頃、大村に生まれま
す。父はレオ小右衛門、母はクララおきあ。
信仰深い家庭に育てられ、次兵衛の信仰が
養われました。後に彼の両親は殉教したと
言われています。6歳で有馬のセミナリオ
に入学し、イエズス会の同宿となります。
1614年、江戸幕府がキリシタン禁令を
発布し、彼はマカオに追放され、マカオの
セミナリオで学びました。ところが日本人
の学生に対する偏見などでセミナリオは閉
鎖されます。20歳の次兵衛は日本に戻り、
伝道士として信徒たちを助けました。迫害
下にあつて信徒たちを最も慰めたのは秘跡
でした。それを実感した次兵衛は司祭への
道を希望し、1622年にマニラへと旅立
ち、アウグスチノ会に入会します。この時
代はまだ、ポルトガル船が貿易のために往
来し、マニラへ行くことは可能でした。16
39年になると、ポルトガル船の来航は禁じ
られてしまいます。1628年、フィリピン
のセブ島で司祭に叙階され、帰国したいと
切に願いました。しかし、帰国の許可はな
かなか長上からは出ませんでした。

1631年、次兵衛はマニラに寄港した
日本人船長の好意で乗船し、帰国に成功し
ます。侍になりすまし、9年ぶりの帰郷で

した。1632年、大御所秀忠が亡くなり、
三代将軍家光の親政時代になると、迫害が
一段と厳しくなつていきます。それにめ
げず彼は昼夜を問わず信徒のために奔走し
ました。昼間は長崎奉行所の馬丁になりす
まして桜町牢屋を訪れ、雲仙で拷問を受け
それに耐えてこの牢屋に捕らえられていた
グティエレス神父、石田神父などを訪ね、
励まします。また夜になると隠れ家で信徒
にゆるしの秘跡を授けたり、ミサをささげ
たりしました。迫害によつて心身ともに疲
労きつた信徒たちはどれほど慰められた
ことでしょう。不眠不休で活動し、信徒を
慰める次兵衛。もっぱら長崎でも有名にな
り、『長崎志』には「彼者八魔法ヲ覚シニ
ヤ」と記されています。勇気があり、大胆
で、知的で、実行力のある司祭。迫害が厳
しい時代にあつて、信仰を続ける人、捨て
る人など実にさまざまでした。失望しかけ
ている世相にあつて、次兵衛は信徒たちに
勇気を与えていく司祭です。彼の行動によ
つて、転んだ人たちもたくさん立ち返つた
と言います。

長崎の奉行所は、取り締まりを厳しくし
ても信徒たちが信仰を捨てないだけでなく、
命令に従わないことに不審を抱き、宣教師
の潜伏に気づきます。こうして今まで以上
に厳しい探索が始まり、莫大な賞金をかけ
ていきました。危険を感じた次兵衛は、馬
丁の仕事をやめて姿をくらまし、一方で奉



行所は人相書を作って指名手配を行います。

1635年、次兵衛が戸根（現在の新琴町）の山中に隠れているという情報が長崎奉行所に入り、奉行は平戸、島原、佐賀、大村の役人たちに命じて、西彼杵半島の大山狩りを行います。一人一步の間隔で列を組み、山を越え、谷を通り、すき間もない程の態勢で搜索します。（山奥には彼が潜んでいたと言われる次兵衛岩という洞窟、また長崎の戸町付近には「金鐔谷」と呼んでいる場所が今でも残っています。）こうした搜索にもかかわらず、次兵衛は江戸に現れ、家光の小姓たちに宣教していました。彼ら数名がキリシタンになり、それが分かって、彼らは処刑されました。激怒した家光は、次兵衛の即刻逮捕の命令を下します。

次兵衛の搜索にあたり、奉行所は信徒を逮捕して彼の居場所を問いただそとしま

したが、彼らはいっさい白状せず、かえって殉教していきました。次兵衛は信徒たちを大事にすると同様に、信徒たちも司祭を大事にし、司祭への愛のために命をもささげました。まさに司祭と信徒の両方が、その当時、教会の共同体として生き生きしていたことがよく分かります。

1636年11月1日、次兵衛は長崎の片淵でついに捕らえられてしまいました。奉行所の役人は彼が神父だとは分ならず、名を尋ねた時、「トマス・デ・サン・アウグスチノ修道士、名は次兵衛、聖アウグスチノ会の神父である」と答えたので、役人たちは非常に驚き、密告者には賞金として銀の棒300本を与えました。役人たちは、彼が魔法で逃げないように厳重に縛つたと言います。

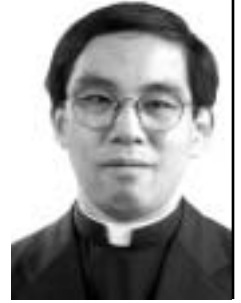
西坂の殉教者（1人）長崎教区

殉教者名	殉教年月日	殉教地	年齢
トマス金鐔次兵衛	1637.11.6	西坂	37

彼に対する拷問は想像を絶するものでした。一年間の獄舎生活。ついに1637年8月21日、最初の穴吊りが三日間に及んで行われ、気を失ったまま牢に戻されました。11月6日、再び穴に吊るされると、衰弱していた次兵衛は息を引き取り、信仰を証しました。37歳。

希望を生きる宣教者 江戸の殉教者・ペト口岐部

取材協力
平林 冬樹 神父
(イエズス会)



どんなに苦難があっても転ばない。むしろそこに希望を持つ。神様のためにすべてをささげていく岐部の人生に、大きな証を見ることが出来ます。

1587年、ペト口岐部は国東半島の浦部に生まれます。父はロマノ岐部、母はマリヤ波多で、信仰深い家庭に生まれました。13歳の時に有馬のセミナリオに入学。セミナリオ卒業を間近に控え、イエズス会に入会したいと思いましたが、実現しませんでした。その後、同宿として甘木と秋月で働きます。

1614年、徳川幕府によるキリスト教禁教令により、岐部は宣教師とともにマカオへ追放されます。追放先で司祭を目指す志をますます固めていきました。しかし、日本人学生に対する偏見や経済難を理由に、マカオの司祭養成所は閉鎖へと追い込まれます。また当時の上長たちは、40歳を過ぎないと司祭に叙階しないとの申し合わせを保持し、教会にはももんもんとした雰囲気か漂っていました。司祭職をあきらめて日本に帰国する人、マニラに新たな道を求める人、ゴアへ向かう人など、実にさまざまな人間模様がうごめいていました。

日本の教会をとっても愛していた岐部は、司祭職への希望をあきらめることができず、1617年頃、マカオを出発してインドの

ゴアへと向かいます。当時の平均寿命が40歳だったと言われますので、30歳代での海外渡航はかなり体にこたえたのではないのでしょうか。ゴアに着くと、彼を司祭にしないようにとの通達が、日本の上長たちからすでに届いていました。それでもあきらめることができずローマを目指して、パキスタン、イラン、イラク、ヨルダンなどを徒歩で横断しました。ことばも風俗も知らず、砂漠の生活に慣れない一人旅は、どんなに苛酷を極めたことでしょう。エルサレムに立ち寄って聖地巡礼をし、彼自身の十字架とキリストの十字架とを重ね合わせながら、深い慰めと勇氣、励ましを与えられたのは確かです。

1620年5月半ば、ローマにたどり着き、イエズス会本部の扉をたたきます。過酷な旅をもろともせず歩んできた彼の姿と日本の上長からの評価との隔たりに、ローマ総本部の人たちは驚きます。篤い信仰と勇氣が認められ、岐部は1620年11月15日33歳の時、司祭に叙階されました。その五日後、イエズス会に入会します。その際、彼がラテン語で書いた願書が残っています。そこには「私は自分の召し出しに満足しています」と記されています。さらに「自分自身の救いと同胞の救いのために前進しようという大きな希望を抱いています」とも……。「前進する」というのも彼のキーワードです。

上：有馬のセミナリヨ（オ）跡
下：ペトロ岐部像（舟越保武作）

井上筑後守政重とペトロ岐部（パウロ・ファローニ作）



16年ぶりに祖国の地を踏んだ岐部は長崎に直行します。しかし、そこには想像を絶する厳しい迫害と殉教の波が押し寄せていました。1633年には日本のイエズス会のフエレイラ神父が棄教。同時期に中浦ジュリアンは殉教していきますが、岐部は長

1622年3月12日、ローマでイグナチオとザビエルの列聖式にあずかった岐部は、帰国を希望します。ザビエルの宣教に対する熱意と日本の苦しみ仲間たちを思えば、ローマに留まることは彼にとって忍びがたいものでした。帰路はリスボンからマカオ、アユタヤ、マニラに至る航海で、3回の難破。嵐で船が沈むのはとても恐ろしい体験だったことでしょう。物騒で海賊が出るかもしれない。1630年、ルバン島から最後の航海に出発し、台風の影響で小舟がまたもや難破したものの、同胞たちへの熱い思いに支えられながら薩摩の坊津にたどり着きます。リスボンを出帆してから、8年の歳月が流れていました。

江戸の殉教者（1人）東京教区

殉教者名	殉教年月日	殉教地	年齢
ペトロ岐部	1639.7	江戸	52

崎の山中に潜伏していました。フエレイラが棄教したと聞いて、夜中、山から下りて町に入り、フエレイラに会って次のように励まします。「神父様、一緒に奉行所へ参りましょう。あなたは背教を取り消し、私とともに死にましよう」。フエレイラは断りましたが、岐部の行動は、兄弟の救いを願う司祭の心情をよく表しています。その後、岐部は東北地方の水沢に活動の拠点を移し、そこで数年間活動しますが、もはや潜伏は困難であることを悟り、1638年3月、宿主に害が及ばぬよう仙台領水沢で捕らえられました。

江戸に護送されて取り調べを受けました。これには將軍家光が直々に立ち会ったとも言われています。さまざまな拷問の末、取り調べ奉行の井上筑後守政重の命により、穴吊りにされました。それでも信仰を捨てない岐部を見た役人は、真っ赤に焼けた鉄棒を彼の腹に押しつけ、絶命させました。1639年7月のことです。享年52歳。岐部の処刑について記した井上筑後守直筆の所見が、今も残っています。

「ペトロ岐部は転び申さず候」。